不定期刊行　　第618号　2017.07.18

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

顧問としてなすべきこと・・・夏山準備合宿で

夏山準備合宿を行った。準備合宿を15、16と決めたときから、テン場の狭いところはいやだなあと思っていたのだが、親の心子知らず、生徒たちの希望はどうしても蓮華に行きたいと、昨年の準備合宿と全く同じコース（初日、扇沢から針ノ木峠、針ノ木岳登頂、2日目蓮華岳から北葛岳、七倉岳を縦走し、七倉尾根を下山）を計画してきた。山岳部歌に歌われる「蓮華の峰」は、学校から見ると一番存在感のある蓮華だけに他ならないが、3年前にピークを踏んだきり、一昨年、昨年と針ノ木峠までは行ったものの、行かないままになっており、生徒たちにとっては最も行きたい山のひとつであったようだ。14日、準備を終えたところで、針ノ木小屋に電話で様子を聞くと、支配人の百瀬さんから「先生、ホントにありがたいんですが、当日は小屋泊りの予約が120、雪が多くてテン場がまだ埋まっているので、テン場の確保に苦慮しているんです。一日延ばせませんか？」とのこと。とはいえ、既に買い出しも済ませ、僕自身が17日は別の山用が入っている。心ならずも無理をお願いして、生徒には「最悪テン場がなくて帰ってくることも覚悟せよ」と伝えると「エーッ」と言われた。

16日、１、2年生23名中所用での欠席2名を除く21名（男子15、女子6）、顧問は僕と黒柳T、コーチの松田さんの3人で引率。総勢24名の大部隊での登山。少しでも早くテン場に着きたいと、大西、松田の車を扇沢から七倉へと車回ししている間に、黒柳Tに引率してもらい、先行させる。生徒より40分遅れの8時50分に出発。大沢小屋でに着くと百瀬さん（父）が混んでいる中、「地元の高校が毎年来てくれるのは本当にありがたい」とコーヒーをご馳走してくださった。こちらのほうが恐縮だ。今年は残雪が多く、今なお、小屋を出てすぐに雪渓に乗れる。程なくして生徒に追いつき、ノドの上まで一気に進んだ。

蓮華沢から上部は夏道も切ってくれてあったが、まだ峠まで雪がシッカリついていたので、生徒たちは雪渓をそのまま直上させた。峠に着くと、北部常駐隊の榛葉隊長がお疲れさまと迎えてくれた。早速テン場の交渉をする。百瀬さん（子）が、混んでいる中でもいろいろ配慮してくださり、なんとか設営場所を確保できた。感謝、感謝。

どうしても2日目に都合がつかないので日帰りで参加させてほしいと言って参加していた女子の2名を下らせねばならない。松田さんと黒柳さんに設営をまかせて、僕は、生徒二人をエスコートして、登ったばかりの道を一緒に下る。ノドの下まで下れば安全地帯である。そこからもう一度、登り返す。2時45分、シャリバテ状態でテン場に帰着。3時10分、左足太ももを攣り、右足股関節が上がらないというAと松田さんをテントキーパーに針の木岳に向けて出発。

針ノ木小屋でオーナーと一緒に

ガスっていて山頂の景色は拝めなかったが、咲き始めたミヤマオダマキやミネウスユキソ

ウ、タカネヤハズハハコなどが出迎えてくれた。雪が随分残っていたので、道を切ってくれてはあったが、念のため、下りは固定ロープを張った。

17 日は6 時半に出発。生徒たち憧れの蓮華の峰を目指す。定刻通りの出発。順調と思いきや、登り始めてすぐに前日テントキーパーをしたAが、足が上がらないという。全体での下山か分断かを検討し、分断することとした。本隊の引率責任は黒柳T、技術的な指導は松田さんにお願いすることにし、大西がAと下山した。Aは登りは足が上がらないものの、下山は順調。9 時 10 分には扇沢に無事に下山。保護者と合流し、小生も下山口の七倉まで送ってもらう。10 時 30 分、1 時間も登れば合流するだろうと、下山口である七倉から登り返し。ところが、豈にはからんや、本隊と合流したのは 13 時 35 分。なんと船窪小屋までの 7/10 にあたる地点。小生自身まさかそこまでは登るとは思ってもいなかったが、生徒の 1/3 は「まさか、来るとは？」という反応。しかし、残りは「やはり来た。」とか「来ると思った。」という反応。疲れはしたが、この反応は嬉しかった。

14 時 20 分、唐沢のぞきの手前で一本取る。休憩後、女子隊の様子が変だ。のぞき込んでみると、唯一 1 年生の女子として参加したBが過呼吸に陥っている。すでに出発してから 8 時間が経過している。頑張り屋の彼女の張りつめていたものが切れたのか、肩をひくひく震わせて、大きく息をしている。手はこわばり、顔も青ざめてこわばっている。他の生徒を出発させて、その場に横たえる。涙を流して泣いている彼女に「大丈夫、安心していいよ」と声をかけて、手を握り、背中をさすりながら落ち着かせる。最近、過呼吸になる生徒が増えているような気がする。実は去年春以来これが、5 例（4 人）目。責任感が強く、頑張り屋で、下級生の女子がこの症状になることが多いように思う。15 分ほどするとようやく落ち着いてきた。脱水とシャリバテもあるのだろう。飲んではいるが、絶対量が足りないと予想された。また聞けば、ほとんど食べていないということだった。水分を摂取させ、強制的にブドウ糖を舐めさせてから、ザック 2 個を小生が背負い、出発。暫く行くと回復してきた。それと呼応するかのようにそれまで何とか持っていた梅雨空から、もう我慢できないとばかりに、強い雨が降りだした。

16 時 10 分、ようやく七倉に全体帰着。9 時間 40 分という超ロングタイムの行動となってしまったが、下山するころにはBも完全に回復し、本隊に追いついた。こうして生徒 18 人無事に帰着。生徒たちは元気である。本来、2 泊 3 日でやってもおかしくないコース。よく頑張った。そう声を掛けると、生徒たちの顔が一斉にほころんだ。

今回の顧問としての対応

① 日帰りの生徒を安全地帯まで送ったこと。
② 危険個所を通過するためのフィックスロープを張ったこと。
③ 生徒の体調トラブルにより隊の分断をはかったこと。
④ 体調トラブルの生徒を送ったあと、再度登り返し、隊と合流したこと。
⑤ 過呼吸の生徒への対応をしたこと。

以上が今回の夏合宿の顧問としての対応である。複数の顧問がいたが故にできた対応である。安全登山に複数顧問の引率は不可欠の要素であると実感した 2 日間だった。

私にとってもいろいろな形で試されることの多い有意義な準備合宿だった。しかし、生徒たちに助けられた部分も大きい。新チームになり、新しい部長がリーダーとして大いに気を吐いてくれた。また、それをサポートするチームメイトたち。弱い一年生をさっかりと支え、励ましながら、最後までみんなが頑張った。なかなかいい合宿となった。